



台湾ランニング事情 第5回 Mizuno 馬拉松接力賽

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員、助理教授）

日本の正月における欠かせない行事として定着した駅伝。しかし、日本語の単語や名詞がそのまま通じる台湾でも、残念ながら「駅伝」という言葉は陸上マニアでも無い限り通じず、「馬拉松接力賽」（マラソンリレー）と訳してようやく、イメージが沸く程度である。

新北市金山をスタート、ゴールとする駅伝に、筆者は交流協会台北事務所チームの一員として参加した。台湾ランニング事情の第5回は、筆者自身が2013-2014年に参加した「Mizuno 馬拉松接力賽（駅伝）」について報告する。

1. Mizuno 馬拉松接力賽の歴史沿革と目的

2005年から毎年秋に開催されている「Mizuno 駅伝」は、昨今の台湾におけるランニング関連のイベントの中では、比較的歴史のあるイベントである。同レースの開催場所は第1回が、志村けんと金城武が出演した台湾観光のCMのロケ地にもなった景勝地の南投県日月潭で開催された後、2006年の第2回以降は、交通規制の事情もあり、新北市金山区で行われている。

同駅伝の主要スポンサーであるミズノ関係者と同レースの開催趣旨、目的について照会したところ、「より良いスポーツ用品とスポーツ振興を通じて社会に貢献する」との経営理念に基づき「台湾人の運動基盤構築、運動の習慣化、健康増進への貢献及び台湾学生の参加を促すことでスポーツへの興味と習慣化、有望な人材の発掘を実現した上で更なるランニングブームを促し、今大会が台湾のスポーツイベントの一大行事になることを願っている」との説明をいただいた。

筆者としても、台湾では青少年や一般市民がスポーツを楽しむ環境は、日本に比べると充実しているとは言い難い面があることを常々感じているが、ここ数年若者を中心としたスポーツへの意識

はかなり好意的になっているのを日々感じているので、このようなイベントが若者に浸透していくことは喜ばしく思っている。

2. MIZUNO2014 駅伝レースの概要

2014年10月19日に開催された「MIZUNO2014 馬拉松接力賽」は、主催者が新北市体育処、台湾ミズノ、中華民国田徑（陸上）協会の共催、運営母体は中華民国田徑（陸上）協会となっている。

大会公式パンフレットでは、「活動目的」のところに、「全国民のスポーツに対する気風を奨励し、基層レベルのスポーツの発展を推し進めし、優秀なスポーツ人材を育成する」となっている。レースは、42.195キロを各チームが8選手でリレー方式で襷をつなぎ、3区と6区は必ず女性を走者とする旨定められている。明記されてはいないが、筆身は他の区間でも女性ランナーが力走する姿を確認しており、女性だけでのチーム編成も可能なようである。チームは、社会人、学生（中高大）と分かれており、参加者の上限年齢の規定は無いが、下限は中学生以上ということで14歳以上となっている。参加チームは社会人450組、学生150組（大学生体育会系、大学生一般、高校生、中学生）となっているが、大会参加標準記録や予選

も無いことから、補欠の2名を含む10人の頭数を揃えれば、誰でも参加可能なレースであり、大会パンフで言及された「基層レベルのスポーツの発展を推し進める」との主旨に合致したものである。2014年のレースの参加チーム数は社会人494、学生115（大学生体育会11、大学生一般53、高校26、中学25）の計609チームであった。なお、参加費用は社会人8000元、学生6000元となっているが、地方の学生チームの参加を奨励するために北部1500元、中部2500元、南部5000元、離島1万円の補助が各チームに支給されるとしている。なお、参加費用の中には、10人分のMizunoのランニングシャツとランニングパンツが含まれており、台湾人がこだわる御得感を感じられるも

のとなっている。

駅伝コースは新北市の金山区、石門区の海外沿いを走るコースである。スタートの金山青年活動中心を出発し、海岸沿いを西へ三芝、淡水方面に走る。草里漁港、第一原発、侵食によって形作られた奇形が見所の石門洞などを通り、麟山鼻の休憩区を折り返す風光明媚なコースである。

42.195キロの駅伝ということで日本の男子高校駅伝と比べると、エースの揃う1区10キロのような長距離区間はなく、最長距離で5区の6.8K、最短距離が女子走者3、6区の4.7Kと際めて平均化されており、勝負どころがない？のも特徴である。

日本人のランニング仲間には、「一流選手が出

第一棒：金山活動中心(起點)－廖添丁廟 (約4.9公里：男)

第二棒：廖添丁廟－草里漁港停車場 (約5.1公里：男)

第三棒：草里漁港停車場－石門洞 (約4.7公里：女)

第四棒：石門洞－交通部麟山鼻遊憩區 (約6公里：男)

第五棒：交通部麟山鼻遊憩區（向前跑400公尺後為折返處）－石門洞 (約6.8公里：男)

第六棒：石門洞－草里漁港停車場 (約4.7公里：女)

第七棒：草里漁港停車場－廖添丁廟 (約5.1公里：男)

第八棒：廖添丁廟－金山活動中心廣場 (終點) (約4.9公里：男)



表1 参加チーム数一覧

チーム別	応募チーム数	実際のエントリー数
社会人チーム	450	494
学生チーム	150	大学体育会 11
		大学一般 53
		高校 26
		中学校 25

場する国際大会で上位入賞者に賞金があるのは理解できるが、台湾では市民ランナー規模の大会でも賞金賞品があるのに驚いた」との見方があるように、台湾のロードレースでは参加者（チーム）のインセンティブを高めるためだと思うが、本大会でも上位入賞チームには賞金が授与されるが、その金額は表2に記した。賞金が獲得できるチームは参加チームの多寡によって異なっている。出場チームが51以上であれば15位まで、31-50チームの場合は10位まで、21-30チームの参加であれば8位以上が賞金獲得の対象となる。したがって、2014年のレースでは、社会人組と大学一般は15位以内が入賞、中高生は8位、大学体育会系は6位が入賞ラインとなる。この詳細な規定の背景には、台湾社会が感じる公平間を基礎として次第に形成していったものがあるのであろうか。

表3は各組の歴代最高記録を記したが、組別で新記録達成時にはボーナスが支払われる。大会記録を破ったチームには、5万元が支払われること

になっているが、会場内のポスター、横断幕、パンフレットの多くに「誰来挑戦2:17:16」（誰が2時間17分16秒の記録に挑むのか）とする文字が目立っていた。いずれにしても、入賞すれば、レース後の「打ち上げ」の軍資金となるどころ、上位チームの間では真剣勝負が繰り広げられるはずである。

3. レースの結果

2014年10月開催のレースは、オリンピックのメダリストを多数輩出しているスポーツ名門校の、国立体育大学Aが2位に2分以上の差をつけて8連覇の偉業を達成したが、期待された大会記録には47秒足りなかった。大学一般と、高校生チームの1位はそれぞれ、大会記録を更新した。社会人組で初優勝した三重箭歌Aチームは2年前のチーム結成ながら、2013年の大会で初出場ながら2位となり、この一年は毎週一度は70人規模での合同練習を行うなどチーム全体を強化して

表2 入賞賞金一覧（台湾元）

順位	1位	2位	3位	4位	5-6位	7-8位	9-10位	11-15位
賞金	30000	20000	15000	10000	5000	4000	3000	2000

表3 各組新記録達成の賞金一覧

チーム別	社会組	大学体育会	大学一般	高校生	中学生
賞金	40000	50000	40000	30000	40000
記録	2:20:58	2:17:16	2:39:36	2:25:38	2:36:50

表4 2014年各組1位の結果

組別	社会組	大学体育会	大学一般	高校生	中学生
名称	三重箭歌A	国立体育大学A	交通大学	三重商工	新北栄
記録	2:23:39	2:18:03	2:39:20	2:25:08	2:38:11

きたが、今大会では見事に初優勝を飾った。また同チームには8人の外国人が所属する国際色のあふれるチームである。

4. 自身のレース参加と雑感

筆者にとっての駅伝経験は、高校2-3年にかけて神奈川県大会に出場した20数年前に遡る。その時は、高校駅伝において最も走力の劣るとされる5区3キロでの出場を果たしたが、今でも特有の雰囲気を感じている。いずれにしろ、20年ぶり以上の駅伝体験を迎えることとなった。

参考記録ではあるが1985年の神奈川県高校駅伝大会で筆者が5区3Kで走ったチームは2時間23分23秒であった。

(1) 2013年第9回大会レース(2013.11.17開催)

チーム記録3時間34分37秒

自己記録8区(4.9K) 21分50秒

2013年のレースはメンバー全員で運転手つきのマイクロバスを借り上げ、台北市内でメンバー全員をピックアップしてから会場へ向かう方法を採用した。号砲が7時、大会パンフレットには第一走者は6時20分までに現地で点呼完了する旨の注意書きがあったので、5時40分現地到着を目標に逆算して、3時半起床、4時15分自宅出発の



2013 スタート

スケジュールとなった。

区間担当は、召集人によるトップダウンで決定されたが、小生は8区アンカーを命じられた。駅伝レースにおけるアンカーの利点は、開会式、にぎやかな準備体操、号砲の瞬間に立ち会えるほか、最終走者としてゴールテープを切る快感が得られる。その一方で、待ち時間の長さは最大の敵であろうか。筆者の場合、8時には移動バスに乗り込み、8区スタート地点には8時20分に到着、その後約2時間を知人もいない中、海岸沿いの吹きさらしの道路際で待つことを余儀なくされた。

事前に交流協会チームメンバーから、どの位のタイムで走れそうかとの想定タイムをすり合わせることもなかったので、到着想定時刻が皆目検討もつかないなか、先頭走者の通過から30分過ぎくらいから、直前に慌てることのないように準備万端で戦闘態勢に入るが、それから30分以上も「まだかまだか」と待ち疲れた頃に7区走者が登場し、無事に襷の引渡しを完了することができた。

個人のレースとは異なり、駅伝は周囲のペース、雰囲気にかき回される。左に海を眺めつつ気分良く走り出したが、最初の1キロは3分台というハイペースになったこともあり、2キロ以降は自重気味になった。しかし3キロ以降は逆風や坂道に難儀したことと、恥ずかしい話だが自身の走る距離が5キロという認識をしていなかったこともあり、ペースはあがらずジリ貧状態でペースダウンしていったが、一応「9人抜き」を演じてどうにかゴールすることができた。しかし、力を出し切れずと言う感じが残ったレースであった。

交流協会チームは、3時間34分36秒、完走445チーム中、99位とどうにか100位以内を達成し、自分では9人抜きをしたことで二桁順位になれたと自己満足して大会を終えた。

(2) 2014年第10回大会レース(2014.10.19開催) チーム記録3時間35分43秒

自己記録5区(6.8K) 30分18秒

2回目の参加は、事前にメンバー全員とMeetingを行い「用意周到？」な状態で挑むこととなった。2回目は走るだけでは物足りないとし、幹事がレース終了後に近場で海鮮料理の昼食会を打ち上げとして行うことを予定したため、バスの借り上げを行わず、自宅の近い者同士で各自タクシー利用で現地集合する方法に変更した。そのため、起床時間を昨年より30分遅らすことができた。小生も含めた台北市士林区在住組の4人は4時45分に出発、真っ暗な陽明山の山道経由で5時半すぎに現地到着した。



2014、6区の様子

チーム責任者より、今年は早い段階から最長区間6.8Kの5区を命じられていた、5区の移動バスの発車時刻は640に完了のため、今年はスタートのシーンを見とどけることなく金山活動中心を離れた。

5区は昨年の8区に比べると美しい砂浜にも降りられ、サービスエリアのような機能を有する休憩所が近くにあり、室内のトイレ、ベンチ含め施設が自由に利用できたのは助かった。昨年は前走者の到達時間の計算を完全に見誤ったため、準備を早くしすぎたが、今年は、事前に計算をする余裕があったことから、想定より5分ほど遅い時間で、4区走者が現れ、無事に襷りレーを果たした。5区は出だしに400Mほどの登り坂を上った後、折り返すとすぐに下り坂となるため、自重したつもりでも最初の1キロを4分ジャストのオーバーペース気味で入ってしまう。2-3キロは横風がきつかったが、フルマラソン練習の一環という気持ちの余裕もあり、自己目測だが28人抜き(30人を抜き、2人に抜かれた)を達成し、無事に6区的女子走者につなぐことができた。

「慶城28号」(交流協会台北事務所の所在地)に名称を変えて望んだ交流協会チームの2014年大会の成績は3時間35分43秒で完走476チーム中



2014 スタート地点の様子



2014、5区襷渡し

表5 交流協会チーム年度別記録

年	名称	タイム	順位
2013	交流協会	3時間34分36秒	99/445
2014	慶城28号	3時間35分43秒	119/476

119位の結果であった。昨年よりタイムと順位が後退したのは残念であるが、2014年の100位の記録が3時間31分12秒と昨年に比べ3分もレベルアップしていたのには、驚かされた。レース終了後は、近場の海鮮料理食堂で反省会を兼ねた打ち上げを行い、楽しく食べ飲み楽しいひと時を過ごすことができた。

(3) 個人的雑感

個人的な感想や気がついた事、関係者への要望を以下に記す。

待ち時間の長さ：レースが7時スタートのため早朝移動とレースまでの待ち時間の長さで走る前に疲労困憊といった事態に陥らぬよう、快適な待機場所の確保や音楽鑑賞や本を持参するなどリラックスできる環境づくりが大切である。

荷物の管理、受け渡し：箱根駅伝のような選手一人に数名のサポートがつくような態勢は望めないで、走る直前まで衣服、アップシューズ等を小荷物としてまとめ、前走者から襷を受け取ると同時に自身の荷物を渡す必要もあるので、コンパクトになるザックや靴入れを準備する必要がある。また走り終わった後は、体が冷える場合もあるので、できれば次走者にあらかじめ上着、汗拭きタオル等を渡しておき、タスキを渡すと同時に自分の荷物を浮け取るのが望ましい。

ランニングパンツと襷の取め方：ほとんどの選手がMIZUNOが提供したシャツとパンツで走っていたが、男子走者の中にはインナー付きのランニングパンツを履いたにもかかわらず、トランクスのパンツも履き、「見せパン」状態で力走する走者が見られたのは、苦笑を禁じえない珍風景であった。また、襷の取め方だが、経験者であれば、襷の長さを調整し、ぶらつかない様に、ランニングシャツとパンツの間に入れ込むのだが、駅伝の初体験者は首に引っ掛ける者、腕に巻きつける者、片手で持つ者、腰にベルトのように縛る者など多



ゴールの様子

彩な格好をする者が多かったのも面白かった。この辺りの指導も大会主催者やスポンサーは、教育の一環として指導する必要があるかもしれない。

区間記録が知りたい：予算の関係かもしれないが、走者のチップは1区とアンカーにしか提供がないため、各チームの総合記録はわかるが、区間ごとの個人記録は自身でのタイム計測はできるが、区間何位かというのは分からない。600以上のチームの参加だと、目測で各区間のタイムまで関係者が記録をとるのは困難であろうが、参加費を多少上乘せしてもいいので区間順位がわかるシステムを導入してもらいたいと思うのは贅沢な要求であろうか。



2014 駅伝メンバー